京都市内の埋蔵文化財発掘調査速報　No.029（R４－７）

# 周山城跡（しゅうざんじょうあと）

調査期間：令和４年 11 月７日（月）～　１１月２８日（月）
調査機関：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

## 1 はじめに

調査地は、右京区京北周山町城山ほかに所在する周山城跡です。周山城は、天正７～９年（1579～81）頃に明智光秀によって築城されました。城跡は、標高 509 mの黒尾山頂に至る山道沿いに天守を備えた本丸を置き、本丸から延びる八つの支尾根上に郭を設けた東西約 1.3 ㎞、南北 0.7 ㎞に及ぶ大規模な山城です。本能寺の変後、同 12 年に豊臣秀吉が周山城に一時期入った史料を最後に記録から消えることから、天正年間後半（～ 1592）には廃城になったと考えられます。現在、山中には石垣や郭の跡が数多く残されており、往時の姿が偲ばれます。

しかし、近年多発する自然災害により土砂の流出や倒木が発生し、石垣等に悪影響を及ぼすことから、令和２年度より、遺構の保全を図るための調査を進めています。

## 2 調査について

調査地は、本丸への登城ルートに位置する「兵糧蔵（ひょうろうぐら）」と伝わる郭（くるわ）の虎口（こぐち）（城門）跡にあたります（図１）。付近には石材が点在しており、石垣の存在が想定されました。ここで倒木が発生し、石材に接触していたことから、倒木や危険木を除去する緊急調査と石垣の修繕を計画しました。

調査の結果、四面に石垣を備えた櫓台（やぐら）や虎口の階段を確認しました（図３）。虎口は、東西２箇所の櫓台で構成され、西櫓台は東櫓台よりも外側に 3.5 m張り出し、城道を登ってくる敵へ横矢をかける構造となっていました。今回の調査対象は西側の櫓台（西櫓台）で、平面形は南北 6.2 ～ 7.2 m、東西 7.8 ～ 6.6 mのやや歪（いびつ）な方形をしています。石垣の高さは 0.3 ～ 2.5 mを測り、南面では最大で５段分が残りますが、櫓台上面の高さが

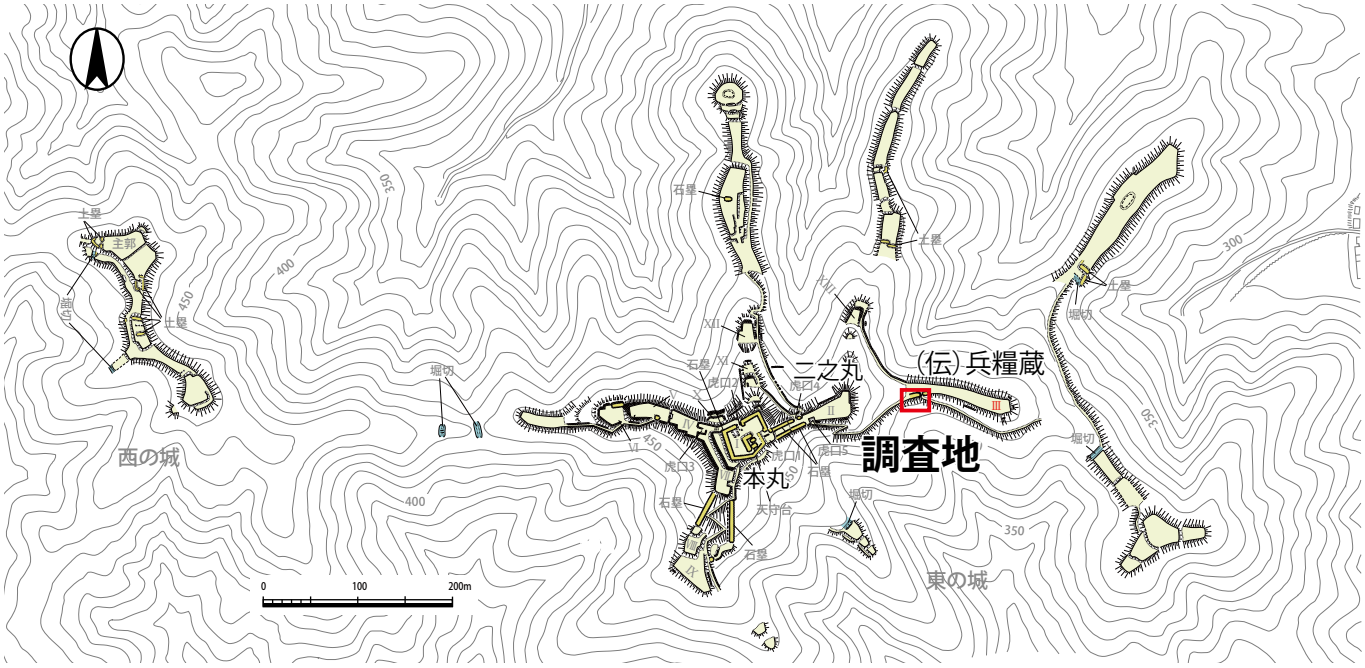


図１　調査地位置図（1：8,000）

約５mであるため、本来はさらに高く積まれていたことがわかります（図２）。石垣の内側は、長径 0.2 m前後の石が裏込(うらご)めとして詰め込まれています。石垣の石材は、長径 0.4 ～ 0.8 mのチャートの自然石が大半で、一部で砂岩を用いています。西面石垣には、幅 1.2 m、長さ 0.6 mの張り出しがあり、櫓台に上がるための階段と判断できます（図４）。また、石垣の前面には積石(つみいし)や裏込めの石材が散乱しており、廃城に際し、城の再利用を防ぐために、隅石(すみいし)や積石を意図的に崩したようです。

東西櫓台の間は 7.5 mを測り、 その間はチャートの自然石からなる階段が２段分残っていました。礎石(そせき)などは確認できず、どのような構造の門が存在したかはわかりませんでした。

図２　西櫓台全景（北東から）

## 3　虎口櫓台について

今回の調査地は、大半が土に埋もれていたこともあり、虎口の詳細は不明でした。調査の結果、総石垣の櫓台が東西に備わる虎口であることがわかりました。これまで、城道と接続する単純な虎口と考えられていましたが、城道を上ってくる敵に対して横矢掛(よこやが)けを行なう構造であることが明らかとなりました。加えて、西櫓台には郭内から櫓台上部に上がるための階段が附属することから、防御の際には、櫓台上に人を配置することを可能とする、より防御力の高いものであることがわかりました。城の中枢である二之丸、本丸へと続く大手道の防御を担う兵糧蔵の虎口が、周山城の中でも重要視されていたことが読み取れます。

また、兵糧蔵は周囲を全て石垣で覆われていることも明らかとなり、周山城が想定以上に堅牢(けんろう)な造りをしていることがわかってきました。

本能寺の変後、時を経(へ)ずして廃城したとされる周山城は、「築城に造詣が深い」とルイス＝フロイスに評された光秀の築城技術が卓越していたことを裏付ける城跡として重要です。今後も調査を進め、周山城の実態を明らかにしていく必要があるでしょう。

（西森正晃）

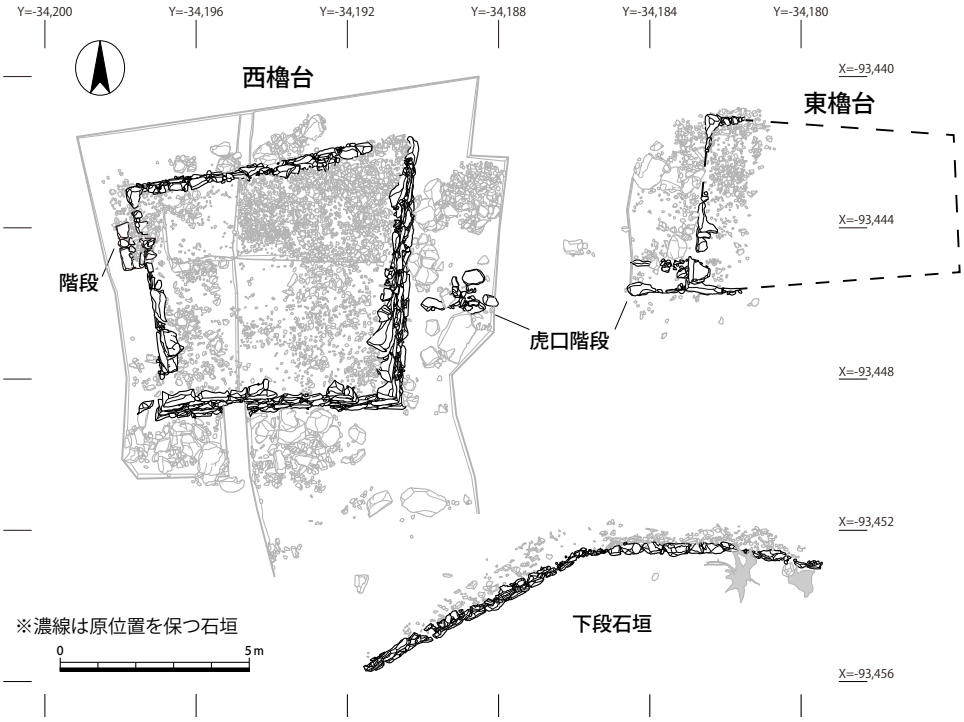


図３　調査区平面図（1：200）

図４　櫓台に上がる階段（北西から）